

森田草平

六文人の横顔

六文人の横顔

夏目漱石の墓その他

雑司ヶ谷の墓地へ行ってみると、墓地の中央杉と槻の林を背にして、表に故人の法名に並べて未亡人の赤い法名を彫りつけた巨大な石碑が立っている。これが文豪夏目漱石の墓だ。石は磨きのかかった常陸産の花崗岩、式も丁度人力車か、さもなければ安楽椅子に法名が腰掛けられている処を思わせるような、なかなかモダンなものだ。が、しかしたまたま雑司ヶ谷の墓地へ遣って来て、故人

を弔った人が、これを見て、これが漱石先生の人格の一端でも、趣味の一片でも代表しているものだと思つたら、それは大きな間違いである。あれは勿論先生が亡くなつてから遺族の手に成つたもので、もしいくらかでも趣味や精神を表わしているとすれば、遺族の方々のそれであつて、先生の関知する所ではない。そこから、一丁足らず離れた所に島村抱月氏の墓所がある。何でも自然石に人生と芸術に関する格言もしくは警句めいた、氏が生前の一句を彫りつけてあつたように記憶するが、あれも果して抱月氏の意志に適つたものか何うかは分らない。し

かし漱石先生の場合はそれ以上に先生とは関係のないもの。ただだけは云い得られるのである。

一体、先生は自分の墓を何う考えていられたらう？ ある時、一本の枯木の下に小さな円い自然石（何も書かない）を据えたものを描いて、「わが墓」と題していられたのを見たことがある。又ある時「おれの墓は広い野の末に土饅頭でも盛って、その上に円い石でも転がして置いてくれたらいいね」というような意味のことを云われたのを聞いたように覚えている。先生の自分の墓に関する感慨は恐らくそれ位なものであらう。しかも

それは終に実行されなかつた。又実行されなくとも仕方のないことかも知れない。思うに、先生としては、そんな事何うでも好かつたのだ。

先生生前の感慨としては、よく平凡人の生活——つまり世間に名も聞えなければ、騒がれもしない、自分は自分だけの事をして、他人の厄介にならず、黙々として生きて黙々と死んで行くと云つたような、平凡人の生活を讃美していられた——さもさも羨ましそうに。これは既に世に立ってその名を謡われ、又それだけの業績も残した人の栄耀の餅の皮かも知れない。しかし、先生がその

一面に於て、「門」の中の宗助のような生活に心からなる憧れを抱いていられたことは疑いもない事実である。私も——と云つて、勿論先生のような名前は持つていないが——それでもなお齡五十を越ゆるに及んで、しみじみ先生の気持ちがるような気がして来た。金さえ不自由しなかつたら、そしてつづまやかな事足るだけの生活を営むことが出来たら、名前を売ることなぞ毫も必要としない、同時に省て恥ずる所のない、隠れた平凡人の生活ほど羨ましいものはない。

先生は「猫」以来諷刺家皮肉家を以て目されるように

なつた。先生自身はそんな積りは毫末もなかつたし、又
そう云われるのが嫌いでもあつた。にも拘らず、子供の
時から普通の人の目には皮肉な依怙地もののように映じ
ていた。それが當っているかいないかは知らない。私は
ただ自分と先生の間で起つた二三の問答を掲げて置きた
い。

一日私は先生と一緒に風呂に這入つた。その当時私は
或事件のために社会的に葬られようとしていたから、か
なり憂鬱な気持になつていた。そして、二人とも生れた
ままの真裸体になつていたので、不図「先生！」と呼び

かけた、「先生は何うですか。神様がもう一度この世へ生れ返させてやると云ったら、生れ代っていらっしやいますか、それともお断りになりますか」と訊ねたものだ。先生は湯槽に腰掛けたまま、しばらく臍の上を平手でぴちやぴちや叩いていられたが「そうだね、神様が今度の世にはこの胃病を直してやると約束してくれたら、俺は喜んでもう一度生れ代って来るよ」と。私は啞然として答える所を知らなかった。もう一つ、これもそれから間もない時分の話だ。私は先生に向って、「人間も子を生まない間は、先祖から受け継いだ生命の流れを自分の手

に握っている。自分一代でこの流れを中断しようと思えば、それも自由だ。しかし一旦子を生んでしまえば、もう何うすることも出来ない。子から孫へと自分の生命がつづいて、世界終末の日に出遭うかも知れないが、それでも手を束ねて見ている外ない。恐ろしいことだ！」と云って見た。すると、先生のいわく、「俺は君のようなセンチメンタルな哲学を持っていない。そんな事を心配した日には、自分のひつた糞の行末迄心配しなければならぬ。自分の糞が畑にかけられて、蕪青になって、それから又他人に喰われて、未来永劫、世界終末の日迄つ

づくじやないか」と。私は学校を出た当座のこととて、
 哲学概論で教わった、ヘーゲルの所謂弁証法なるものを
 覚えていた。そこで、「どうも先生はヘーゲリヤンで困
 る」と云った、「僕が何とか云つて一つの対当セーシスを提出す
 れば、それに対して直ぐに反対アンチセーシス対当を立てられる。嘗て
 うむ、そうかと云われた例がない。世間で旋毛つむじ曲りのよ
 うに云われるのも故あるかな。」先生のいわく、「馬鹿
 云え、俺の旋毛は真直だ。真理はその中庸にある。反対アンチ
 対当セーシスが気に入らなかつたらそれらを綜合して綜合真理シンセーシスを求
 めたらいいじやないか」と。

近頃唯物的弁証法なるものが流行つて来た。それに件れて、夏目漱石を今日に生かして置いたらというようなことを興味を持って聞く人がある。先生は徹底した唯物論者ではあった。しかしながら乍併私どもの聞いた範圍では、「金は過去の努力の象徴である。敢て卑しむべきでない」とか。「株で儲けたような浮いた金と、吾々の汗と労力とで得た金とは紙幣の色でも違えて置いて貰いたいものだね」といったような、極めてナイーブな二三の見解を口にされたに留まる。「心」の巻末でも自白していられる通り、晩年の先生は過去の明治時代の作家を以て任じて

いられた。恐らくは先生の蝕まれた健康がそうさせたのでもあろう。健康な夏目漱石を考えることは、実際あった漱石を差措いて、別の漱石を考えることである。

平田秃木先生の引込思案

漱石先生の歿後、最も漱石らしい、もしくは漱石に近い素質を持った人物を挙げよと云われるなら、勿論私一個の所見じやあるが、直ちに平田秃木先生を指名することを躊躇しない。第一にわが秃木先生は江戸っ子である。

それから漱石歿後その英文学に於ける造詣に於て、一あつて二なきわが国の權威であることは、誰しも異存のない所であろう。最後に先生は敏感で神経質で、機智縦横である。それでいて先生に「猫」は書けない、書けない筈はないように見えて書けない。他でもない、先生は稀れに見るはにかみやで、殆ど病的と云つてもいい位の引込み思案だからである。その引込み思案が祟つて、折角持つて生れた機智も縦横には振われぬ。この人にしてこの病あり矣。これに幾分の^ず迂^う々々しさを加味したらとは、先生を知る程の者の等しく痛感する所である。こ

うなると、凶迂々々しさも一種の天分には相違ない。世には臆面のないだけで持てている文壇人も幾許もあるんだから。

嘗て友人上田柳村先生の濃艶な文体を評して、「色の白いは七難隠すと云いますからね」と、含羞みながら云われたのは、先生一代の思い切った皮肉であつた。先生にはただ胡座を搔かせさえすればいい。多少胡座を搔かれたらしく見えるものに、「新英米文学」八月号の「女流作家について」がある。勿旨小品じゃあるが。市川糸八の団十郎張りから扱き下ろして、一体女は男の作家を

張りたがるものだと言うので、その方の御大デジョージ・エリオット以下大小女流作家を総舐めにした処、全く三斗の溜飲を下げるに足るものだ。しかも外国の作家についてこれしきの事すら確信を以て云うだけの識見を有するもの、今の処先生の外には一寸見当らない。

畸人内田百閒君

漱石先生の所謂門下生の中で、先生自らが生前ひそかに畏敬していられたのは、恐らく寺田（吉村冬彦）さん

位なものであつたらう。或いは寺田さん一人だと云い切つた方がいいかも知れない。この人には何処か——勿論全体としてではないが——その人柄に漱石以上と思われ
るものがある。しかし今逸話でその横顔を描いて見よう
とすると、あまりに平穩無事な憾みがないでもない。そ
こへ行くと、鈴木三重吉君は多事だ。しかも、いざ書こ
うとすると、何にも書くことがない。三重吉自身語れば、
凡てが詩になっている。それでいて、他人が書いたので
は一向面白くない。つまり鈴木君には私のように間の抜
けた、とぼけた所がないからであらうと思われる。そこ

で著名の文壇人とは云われないかも知れぬが、已むなく拾い上げたのが内田百閒君である。

内田君がその著「冥途」に見られるような、夢幻的な、凝った美文家であることは、今ここに紹介しようとは思わない。私が紹介しようとするのは、その奇智縦横、岡山県人らしく才はじけていて、しかも何処か抜けた所のある、つまり畸人伝中の一人としてである。読者は先ず彼が死んだ芥川龍之介君をして、「どうも近頃の君を見ると恐い、眼の色が違っている。それよりも始終山高帽子を被ってるのが変だ。二重橋から直訴の奉書を持って

駈け込む連中は大抵山高帽子を被っていますからね」と、
競々として恐れしめた当事者であることを想い出して頂
きたい。

しかしそれは芥川君の杞憂であった。彼は決して狂人
ではない。ただ所謂「財界の名士」で、私どもの仲間の
借金王である。若しくはあつたに過ぎない。その時分の
こと、彼は索乱せる一家の財政を整理する目的で、金一
万円を調達するために郷里岡山に向つたが、土地一流の
旅館三好野華壇に陣取つた。すると、因業な叔父がそれ
と知つて、「借金をしに来て、あんな上等な旅館に泊る

「奴があるか」とばかり、それを口実にして、終にその金を貸してくれなかつたという。が、そんな事は彼にあっては何でもない。僅かに十円の金を借りるために、わざわざ鎌倉にいる私の許まで二等の汽車に乗って、自動車で乗りつけて、主人と一緒に酒を飲んで、その晩は一泊した上、明くる朝十円持って帰って行く。大半は汽車賃と自動車代に消えているのだ。どうも娛しみに借金してののだしか思われない。

私が法政の英語の教師になった時、「あなたは教場で間違いを教えて、それと氣附いた時後から訂正するか」

と訊くから、「そりや勿論訂正するさ」と答えると、「そりやあなたが新米の教師だからですよ。抑も生徒というものには、正しい事を教えても、なかなか覚えてくれるものでない。況んや嘘をや、間違いをや。従って教師たるものは、どんな嘘を教えても、無益にして且無害である。然るに自分が一つ間違いを教えたからと云って、それが直ちに生徒に害毒を流すように考えるのは、甚しい自惚れだ」と云って、私を驚かせたのもこの人である。

が、要するに内田君はアナクロニズムの存在だ。彼はその文章でも分る通り凝り性である。あれだけの奇智と

才とを持ちながら、惜しいことにジャーナリストイック
な天分がない。従って一文の金にもならない。一生貧乏
するようになっている。

芥川龍之介の恐怖病

芥川君は、内田君の山高帽子の外にも、晩年いろんな
物を怖がっていた。或いはどうかした機みから、怖い怖
いと云うのが口癖になったのかも知れない。同君が犬を
恐れた話は有名なものだ。又日常生活の偶ふとした所に潜

んでいる神秘というようなものに対しても、非常に尖鋭な恐怖を感じたものらしい。よく「この壁の色は怖いよ」とか、「あの枝の動き工合は変だよ」とか、「昨夜いやな蛾が飛んで来た」とか云っては、無気味な顔をして見せた。村上鬼城氏の俳句だの、内田百閒君の短篇だのを特に推賞していたのも、そう云う気持に共鳴する点があったからだろうと思われる。内田君の山高帽に無暗に拘泥して、「山高帽子は怖いよ。そんな物を被って来て、僕をおどかさすんじゃないか。それだけは廃してくれたまえ」なぞと云い出したのもその時分のことらしい。私は

その話を内田君から聞いて、「君、そりやどつちが狂人だか分らないぞ。だが、そいつは小説になるね。芥川を狂人でなくすれば、君が狂人になる。又君を狂人でなくするためには、芥川が狂人にならなければならぬ。両方で相手を狂人だと思つて、両方で怖がつているテーマは面白いじゃないか。一つアンドレーエフの「心」の真似をしてやって見るんだね」と戯談に勧めたものだ。芥川君の死後、内田君はそれを実行して、「山高帽子」を書いた。

これは大分以前の話だが、芥川君がまだ横須賀の海軍

機関学校の教官をしていた頃、同じ学校の同じ教官をしていた内田君が田端の家を訪ねて行ったら、すぐに二階の書齋に通された。芥川君は機関学校時代鎌倉に寓居していた筈だから、これは多分休暇か何かで東京に帰っていたものであろう。内田君が二階で待っていると、何となく階下の気配が平常と違っている。妙だなと思いつながら待っていると、もう夕方近く座敷の中が仄暗くなりかけたところへ、階子段にさやさやと衣ずれの音がして、そこへ上がって来たのが当の芥川君だ。同君は紋附の重ね着に袴をつけて、白足袋を穿いて、常よりも一層長い

顔をしていた。

「何うしたんだ？」と、百閒君が吃驚して訊いた。

「何うもしないけれど。これから結婚式に行くんだよ。」

「だれの？」

「僕のさ。」

「今晚は御婚礼なのか。」

「そうなんだよ。それだから、お待たせして失敬しちや
った。」

これには物に動ぜぬ内田君も、大分驚いたらしい。それから十何年の後、芥川君が自殺する二三日前に内田君

の会った時、芥川君は、自分からこの時の話を持ち出して、「そうそう、そんな事があつたねえ。あの時の君の不思議な顔を今でも覚えているよ」と云つて、何となく往時を懐かしがっていたと聞く。

芥川君は多くの場合、来客をその二階の書齋に通した。書齋の前に廊下があつて。そこに立つと下の庭が見下ろされる。心なき客は、その欄干に靠れて、よく卷菘の吸殻を庭の青苔の上に投げ捨てたものだ。芥川君はそれを非常に気にしていた。

「そんな客には、もう帰ってくれと云いたいのだが、ま

さかそうも云われぬし、癩にさわってしまふ」と、好くこぼしこぼししていたそうなの。

同君の訃を聞いて駈けつけた弔問の客は、二階の書齋に集まっていた。暑い時分なので、座敷の中にいる者よりは、廊下に立っている者の方が多かった。それ等の客の中には、無遠慮に吸殻を下の庭に投げ捨てる者もあった。下を覗いて見ると、美しい青苔の上には、数え切れない程の吸殻が乱雑に散らかっていた。

佐藤春夫君の顔

私と佐藤春夫君とは、同君が最初の出京以来の知合だから随分古いものだが、二三年前同君が法政大学に来るようになってから屢々学校で顔を合わせる機会を生じた。佐藤君は学校で「文話」というものを受け持っていた。「文話」というのは、何んな事を話すのだから、聞いたことがないから分らないが、多分文章上の話か、或いは極く一般の文学談というようなものに違いない。初めの間は、「文話」の外に作文も受け持っていてくれたけ

れど、今は「文話」だけで、一学期に何回と数える程しか学校に出て来ない。しかし、その何回かやって来る時の佐藤君の顔というものが実に大変なものだ。放課時間の教授室では、好い年をした教員連が他愛もないことを話し合って、面白そうに興じている。自分は、他の学校の掛け持ちをしたことがないから、他校の事は丸で知らないが、方々で稼いでいる同僚の話を知ると、この学校程教授室の呑気な面白いところはないと云う話だ。時に據ると、給仕までがみんなの話に捲き込まれて、お茶の盆を手に持ったまま立ち往生することもある。そう云う

中へ、佐藤春夫君がむつとして這入って来る。学校に来る時は、いつも和服だ。極まってフェルト草履を穿いている。入口の衝立の陰から音もなく現われて出るんだが、人の顔を見ても、にこりともしない。怒ったような、気の脱けたような、寒気立ったような、妙に膨れた把握すべからざる相貌である。たまに来てくれる人ではあるし、知合も少ないことだから、自分が気が附いてお愛想のつもりで、「まあ、こっちへ入らっしゃい」とでも云えば、同君は黙って這入って来る。近来少し脚を痛めているらしいが、その不自由らしい歩き振りが益々同君の不機嫌

な表情の印象を強めるのだ。

「どうしました？　妙な顔をしていますね？」と自分は聞いて見た。

「いや」と同君は退儀そうに云うのだ。「どうもしません。」

「だが、どうも妙な顔をしてるじゃないか。」

「いや。どうもしません。」

それ切りで、にこりともしない。学校へ出て来るのが、あんな顔をする程いやなわけでもあるまいし、又いやなもの無理に出て来ければならぬような同君の身上では

ない。いや、それどころか、同君は法政大学に来るのが好きだとも聞く。と云って、みんなを馬鹿にして、わざわざそんな顔をして見せるような同君でないことは、長い付き合いから自分が保証してもいい。又昔はあんな気むずかしい顔をしていなかったことも自分は承知している。では、何うして最近あんな顔をしているのか——それは分らない。分らないが、兎に角傍の者に気を揉ませる顔だ。失礼を顧ずして云えば、「オナニイの後を思わせるような」とも形容したい。精神的オナニイの結晶！ が、しかし自分は同君の内部生活に立ち入る程、

深く同君を知る問柄ではない。

同君と同棲した人、もしくは同君と結婚した人とは、自分は不思議に一度ずつ会っている。今度の人とも何時か又相識る機会が与えられるであろう。

矢崎嵯峨の舎氏と蚤

私は嵯峨の舎おむろ氏の「初恋」を子供の時に読んだ。それ以来名前だけは忘れないが、氏とは未だ一度の面識もない。ただ同氏は数年前まで陸軍士官学校に教授をし

ていられたので、その間の消息は時折友人から伝聞した。

同氏は長い間士官学校で露語の教官をしていられたが、露語科の同僚には、最近に勇退した昇曙夢君などもあった。外人講師は、矢崎氏の勇退せられる前迄は、トドロキツチ氏であったと聞く。矢崎氏はいかにも時代離れのした、寧ろ年寄りみだ風貌で、頸のカラーの周りから太い黒紐を胸に垂らして、その端に財布を吊るしていらるといったような村夫子然たる様子をしていた。尖の下がった口髭も貧乏たらしく、無精に髪を伸ばして、少し前屈みで、何処かよぼよぼした感じであった。その矢崎

氏が、トドロキツチ氏と流暢な露語で話しをしていられるのを聞くと、同氏の文学史上の地位や閱歴を知らない若い教官連は目を見張って驚いたものだそう。学校で教える教程は無論安易な程度のものに相違あるまいが、同氏の露語の蘊蓄と實力は、陸軍の教育總監部内に於て、随一とせられていた。

それでいて、同氏は陸軍で厚遇せられたとも云われな。い。勇退の時はどの位に昇進せられたか知らないが、その前は長い間高等官七等から六等であった。当時、士官学校には日直と云う勤務があつて、語学教官部の中から、

高等官六等以下の者が、毎日一名ずつ後に残って、その日の命令なり急の授案繰代えなりを、部内の者に伝達する。授業は午前中に終るから、終ったらみんな帰ってしまふ。日直は一般の勤務時間の午後三時又は四時迄居残るのである。しかし大概の者は、その時間までいないで好い加減な時刻になると、副官の許へ別に用事はないかと聞きに行つて、ないと云えば、直ぐ帰ってしまうのが常であつた。然るに矢崎氏はいつでも規定の時間迄ちやんと居残つていられたのである。士官学校のがらんとした教官室の中に、矢崎氏がただ一人ぽつねんとして、何

の用事もないのに居残っていられる有様を想像すると、一脈の淋しい感慨が湧く。

いつかその教官室で蚤の話がはずんだことがある。時候の加減か蚤が多くて困ると誰かが云い出すと、矢崎氏はそれに伴って、「私の許なんざ蚤が本等に多くて困ります。昨夜も子供がかいがるもんだから、夜半に起きて蚤を取ってやりましたら——あなた、八十何匹か取れましたよ」と云ったものだ。聞いている者がみんな吃驚して、「まさか！」でその話はお仕舞いになったそうだが、私にこの話を伝えた男は、その八十何匹は屹度本当

だろうよと云っていた。

同氏は、士官学校の退官後、大久保の辺とかで古本屋を開かれたと聞く。嵯峨の舎さんの商売としては、こんな似合いの商売はなからうと思うと共に、私はその話を聞いた時、切にお店の繁昌を祈った次第である。（昭和七年九月「文芸春秋」）

日本文学電子図書館

六文人の横顔

著 者：森田草平

制作者：宮澤一郎

底 本：「のんびりした話」
大畑書店

昭和8年5月15日 印刷

昭和8年5月24日 発行

日本文学電子図書館